

Ⅲ 養 豚 部 門

1. 本県養豚の動向

- (1) 平成 21 年 2 月 1 日現在の県内豚飼養状況は、飼養戸数 71 戸、頭数 79,700 頭で対前年比は戸数 102.9%、頭数 103.7%となり、戸数で 2 戸増、頭数では 2,900 頭の増となった。また、1 戸当り平均飼養頭数は 1,113 頭となり前年比 100.8%となった。
- (2) 平成 20 年度における豚肉の県内自給率（県内総消費量 166.6 千トに占める県内生産量 10.4 千ト）は 6.3%で前年比 0.4%減となった。

2. 診断農家成績の分析概要

平成 21 年度における養豚部門の経営診断指導対象は、畜産経営技術高度化促進事業では経営診断改善指導対象 5 戸の中から総合的な分析に必要な数値が把握できた 3 事例について行った。成績は表 1～3 のとおりであるが、平成 18 年度に改訂のあった本県畜産経営指標（養豚）及び各経営の前年度データと比較しながら経営成績の概要を述べる。

(1) 経営の概況

- ◆ 3 事例とも繁殖・肥育一貫経営であり、すべて養豚専業経営である。
- ◆ 経営組織としては 2 事例（No.1・No.2）が法人経営で 1 事例（No.3）は家族経営である。
- ◆ 労働人員 1 人当り母豚飼養頭数は全 3 例の平均で 225 頭であった。

(2) 繁殖成績

◆ 人工授精の活用

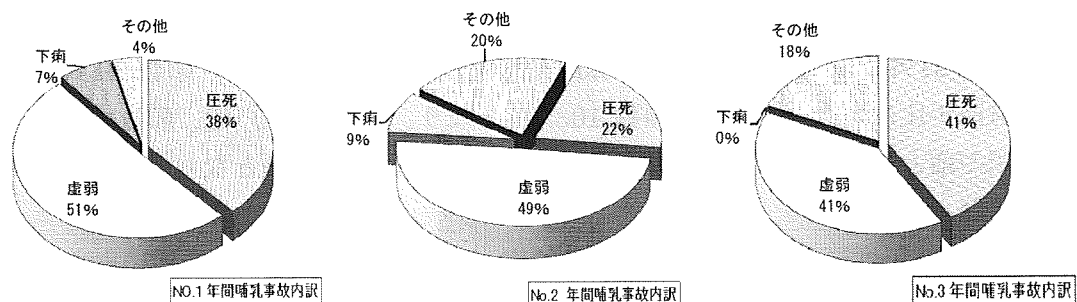
3 事例の平均母豚飼養頭数 225 頭に対して、平均飼養種雄豚数は 8.8 頭で、雄豚一頭当りの母豚数は平均 25.5 頭（16～35 頭）となっている。これは自然交配主体（以下 NS）か人工授精技術活用（以下 AI）かによって異なる。

AI を活用しているのは 3 事例のうち No.1 と No.3 の 2 事例の農場であるが、利用方法は自家採取での 100%AI または購入精液である。100%AI 活用農場での雄豚保有頭数は母豚 17～36 頭に対して 1 頭で、比率の低い農場は F₁ 生産のための純粋雄豚（L・W）を抱えていることが関係していると思われる。

◆ 1 腹当りの生存子豚、離乳子豚頭数と育成率

1 腹当り生存子豚頭数は平均 10.9 頭（10.3～12.1 頭）で指標値 10.6 頭以上となった事例は No.2 の 1 事例のみであった。生存産子数が 10 頭を下回った事例はなく、今後

とも、分娩時の助産や分割授乳の実施による虚弱死の低減、交配適期をつかみ、ずれによる受胎数（総産子数）の低下を防ぎ、日常の発情チェックや夏場の精液チェックなど季節ごとに応じた交配妊娠管理を行う等、生存産子数の増加に努めて欲しい。



1 腹当り離乳子豚頭数の平均は 9.3 頭(9.1~9.4 頭)でばらつきは少なかったものの、指標より 0.5 頭下回り、指標値をクリアーした事例はなかった。

離乳子豚数は生存子豚数や育成率などによって大きく変動する。正常な飼育管理下における 1 腹当りの産子数は、母豚の品種構成や遺伝的資質によるところが大きく、これに交配時の発情状況（交配適期）と交配精液性状、種付回数などが総合されたものであるため、人為的に大幅増やすことは難しいものの、離乳子豚数の改善策としては分娩施設面の見直し、分娩・哺乳時のきめ細やかな管理や分割授乳の導入、夏場の圧死対策などの飼養管理改善による育成率の向上を目指す方が容易であろう。

育成率は平均 85.0%となり、77.7%~89.1%と総じて低かった。全ての事例において平均で 90%に達しておらず、こうした経営では哺乳豚管理の見直しが必要。特に哺乳中子豚事故で 1 腹当り 1 頭以上を損耗しているこの 3 事例については、哺乳子豚管理の見直しや改善が必要である。

◆ 離乳日令と分娩回転数

3 事例の平均離乳日令は 26.3 日で前年より 0.7 日の増となり、3 事例とも 26 日前後とバラツキはなかった。

分娩回転数の平均は 2.37 回転で、全ての事例で指標値 2.3 回転をクリアーでき、最低値 2.31~最高値 2.45 と良好な成績となった。

◆ 更新率

3 例の種雌豚更新率平均は 27.1%であったが、外部導入から自家更新へ切り替えた No.3 は更新率が低く、今後は安定的に更新するための交配計画が必要となる。

更新に際しては年間を通じて毎月安定した分娩数が得られるように計画的に行うことが望ましく、また、淘汰・更新は固体ごとの繁殖成績記録によつて的確に行い、母豚群の平均産次を 4~5 産にすることが望ましい。

(3) 肥育成績

◆ 母豚1頭当り出荷頭数

1母豚当り出荷頭数は、17.4～20.9頭となり、平均は19.1頭と前年平均より0.3頭の減となった。指標値の21.4頭をクリアーできた農場はなかったものの、20頭以上の良好な事例もあった。しかし平均値は指標値と比べると2.3頭下回っている。原因としては、いろいろな要因が複合した結果ではあるが、その主な要因として考えられるものに育成率の低下につながる哺乳中子豚の事故と離乳後の育成から肥育出荷までの事故による損耗がある。

◆ 事故率

離乳から出荷までの事故率の平均は7.2%で指標の3%以下とは大きな隔たりがあるものの前年度平均より2.5%の減となり、年々減少傾向にある。農場間較差は6.8%～7.9%と格差はなく、No.1の7.9%は一昨年21.6%、昨年14.6%と事故率が年々低くなりPRRS関連による事故となっているが、今後は低い数値で安定していく傾向にある。

近年、PRRSやPED等の新しい病気や、ヘモフィルス、パスツレラ等の慢性呼吸器疾病も広く浸潤している中で事故率3%以下という指標は、高いハードルとなっているが、4%以下レベルにまで到達するよう努力が望まれる。

◆ 肉豚・枝肉の出荷

本年度の平均出荷生体重は115.0kgで前年平均と比べ1.5kg上回った。平均枝肉重量は75.3kgで前年平均と比べ1.0kg上回り、肉豚出荷豚の枝肉歩留まり率は平均で65.5%となった。

◆ 飼料要求率

本成績の農場飼料要求率の積算は、農場内での飼料給与総量を肉豚出荷生体量と候補豚頭数(110kgと推定)の合計体重で除したものであり、活豚出荷、棚卸体重の増減を見ていない。

農場飼料要求率は平均で3.46(3.37～3.57)で、指標値の3.4をクリアーしている事例はNo.1のみであった。農場要求率には事故率が大きく影響し、特に肥育中期以後の事故が大きく関与するので事故内容を把握した損耗防止対策が必要である。

◆ 豚舎面積と密飼いの影響

豚舎面積と飼養密度の評価については、全体面積の大小よりも、ステージ別・用途別の豚房のアンバランスによることが多く、密飼いの多くは特に離乳豚房、肥育豚房の不足による例が多い。慢性呼吸器病による事故率の上昇原因として密飼いが主要な原因として重視されているが、頭数に合せた施設の改善か、施設規模に合せた飼養頭数の調節により事故率の低減を図って欲しい。

(4) 収益・経済性分析

◆ 種豚1頭当り生産物売上高

養豚一貫経営における収益性を検討するにあたり、母豚1頭当りの生産物売上高をみると表-2・表-3にあるように、平均634,724円(584,311円~728,422円)で前年平均より124,289円の減収でした。

出荷豚の枝肉1kg当り販売額は表-3に示すように平均436.1円となり、前年度平均と比べ81.2円の減少となり、8月からの低豚価の影響もあり、全ての経営で前年度より販売単価が低下した。

戸々で見るとNo.2の467円とNO.3の562円とでは95円の差があった。各経営の決算期の関係による市場価格差もあり一概に比較出来ない部分もあるものの、銘柄豚生産割合や上物率等の違いも、価格差を大きくする要因の一部である。

肉豚出荷価格の年間変動は大きく、出荷のタイミングによって同質の肉豚でも大きな収益差が生じる。平成21年の東京市場上物価格は平均428円で本年度調査3農場の年間枝肉価格平均436円となり上物平均価格の8円高となった。

平成21年 東京市場 上物平均枝肉卸売価格 (円/kg)

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
377	428	421	413	490	511	474	388	380	386	402	462

◆ 生産費

種雌豚1頭当りの生産費用及びその構成費目の内訳については表-2に示すとおりである。

種雌豚1頭当りの3事例平均生産費用は589,404円となり、その構成費割合を円グラフにしたものが図-1である。平均では構成費割合の大きい順に、飼料費が過半の57%を占め、次いで人件費(給与手当+役員報酬)が19%、衛生費8%、これらの主要3費目で84%となった。また各農場の主要費目割合を棒グラフにしたものが図-2である。

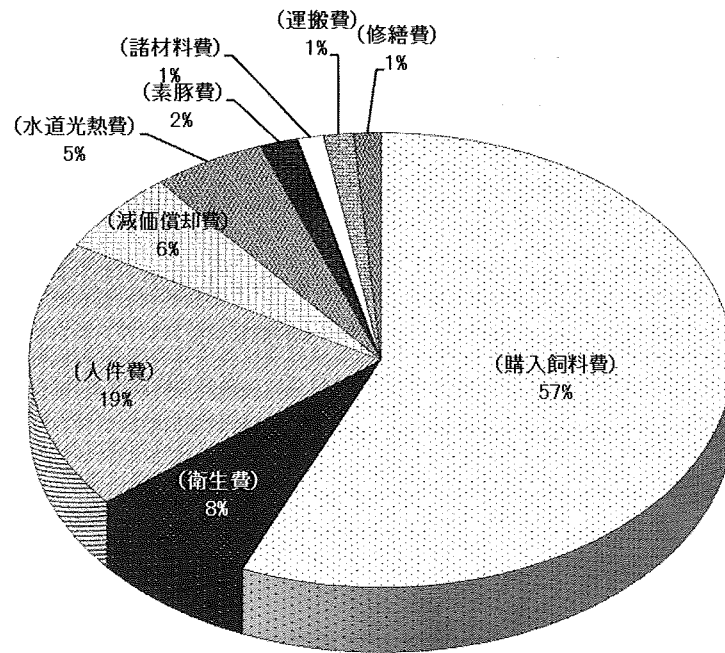


図-1. 生産費用の構成比割合

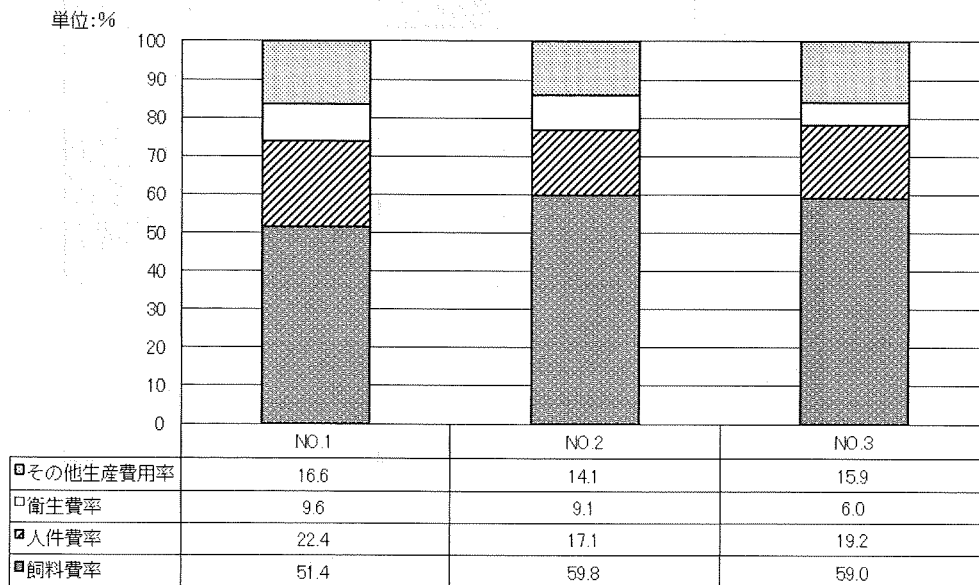


図-2. 生産費用の構成比割合

◆ 売上高に占める主要生産費の割合

種雌豚1頭当りの生産物売上高と生産・販売費用を対比してみると、図-3のように3事例全ての経営で生産・販売費用が生産物売上高より上回った。当期利益では補填金、奨励金等の事業外収益によりプラスとなったものの養豚生産販売では費用が売上を上回る結果となった。

売上高に占める各生産費目の割合は、図-4に示すとおりである。飼料費の割合については3農場の平均は53.9%で前年より1.3%増加した。

売上高に対する衛生費割合は表-3のとおりで、平均6.2%となり種豚1頭当りの衛生費(表-2)については27,760円~51,562円と差があった。

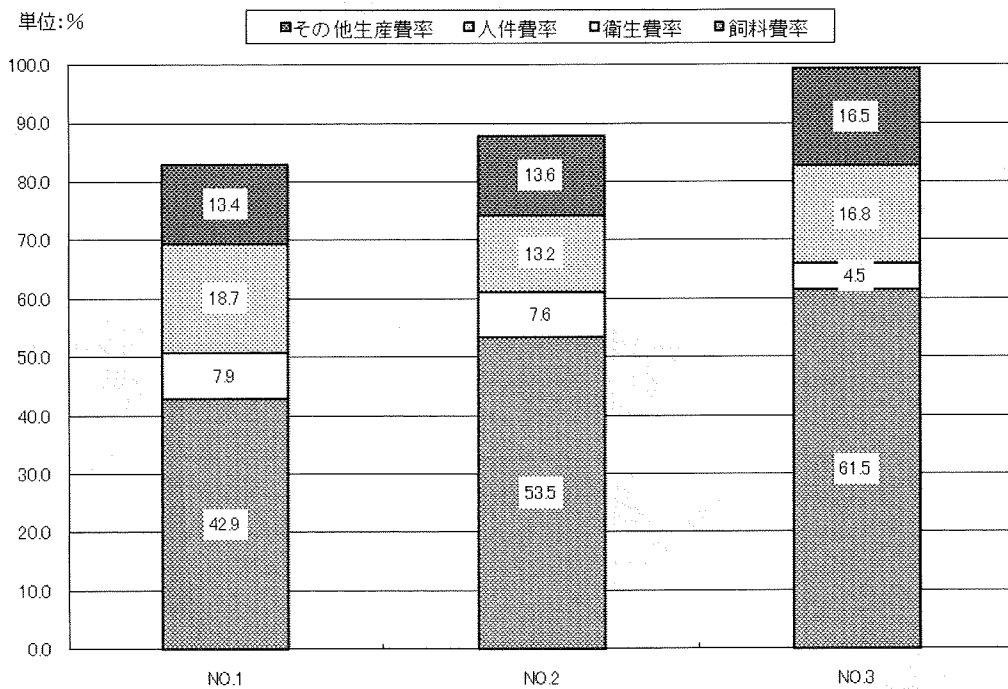


図-3. 売上高に占める主要生産費の割合

◆ 飼料価格

生産費で最大構成比率を占める飼料費の1kg当り平均価格は表-3に示すように53.6円となり前年平均より5.5円上昇した。一昨年から比べ平均で13.6円上昇したことになる。それぞれの、飼料単価については、年間全飼料購入金額を全購入量で除したもので、自家配合(原材料価格のみで労賃をみない)、をしているところ等があるため

単純に比較はできない要素もあるが、43円～66円と差があり、購入単価以外にも飼料給与体系の検討が望まれる。また、食品未利用資源の活用により、飼料単価を抑えている事例もある。

◆ 種豚1頭当り利益

1母豚当たりの飼料費（加重平均）が前年比85.7%ととなり、母豚当たりの生産原価も前年比89.3%と低減できたものの、8月からの低豚価の影響や母豚当たりの出荷頭数の減少等により売上高も大幅に減少し種雌豚1頭当たりの当期利益の平均は-36,050円となり前年平均と比べ30,920円のマイナスとなった。

それぞれの事例を見てみると、No.1は飼料kg当たり平均価格が前年に比べ6円の37円/kgとなり、飼料費コスト削減により売上高飼料費率は50%切っている。出荷豚1頭当たりの生産原価も-4,581円の26,827円とコストダウンされた。しかし枝肉kg販売単価が低豚価の影響で前年に比べ85円安の438円となり、出荷豚1頭当たりの販売額は平均枝肉重量で前年比1.3kg増となったものの前年より5,738円安い33,176円となった。また1母豚当たりの肉豚出荷頭数も17.4頭と少なかったため、1母豚当たりの売上高は前年より126千円の減少で当期利益は△4,136円という結果となった。

No.2は飼料kg当たり平均価格が前年に比べ6円の46円/kgとなり出荷豚1頭当たりの生産原価は28,550円と前年に比べ2,003円となった。枝肉kg販売単価は低豚価の影響で前年に比べ56円安の411円となり、出荷豚1頭当たりの販売額は平均枝肉重量で前年比1.4kg増となったものの、前年より3,590円安い30,683円となった。1母豚当たりの肉豚出荷頭数は19.0頭と前年に比べ1.5頭減り、1母豚当たりの売上高は前年より133千円減少した。しかし当期利益は事業外収入が多かったことにより1母豚当たり10,059円の黒字になった。

No.3の飼料kg当たり平均価格は前年に比べ13円の53円/kgとなり、出荷豚1頭当たりの生産原価は前年度に比べ3,136円となったものの、1頭当たりの販売額も枝肉kg販売単価の低下により前年に比べ7,619円となった。そのため1母豚当たり売上高も前年比-113千円減少し、1母豚当たりの当期利益は△114,072円となった。

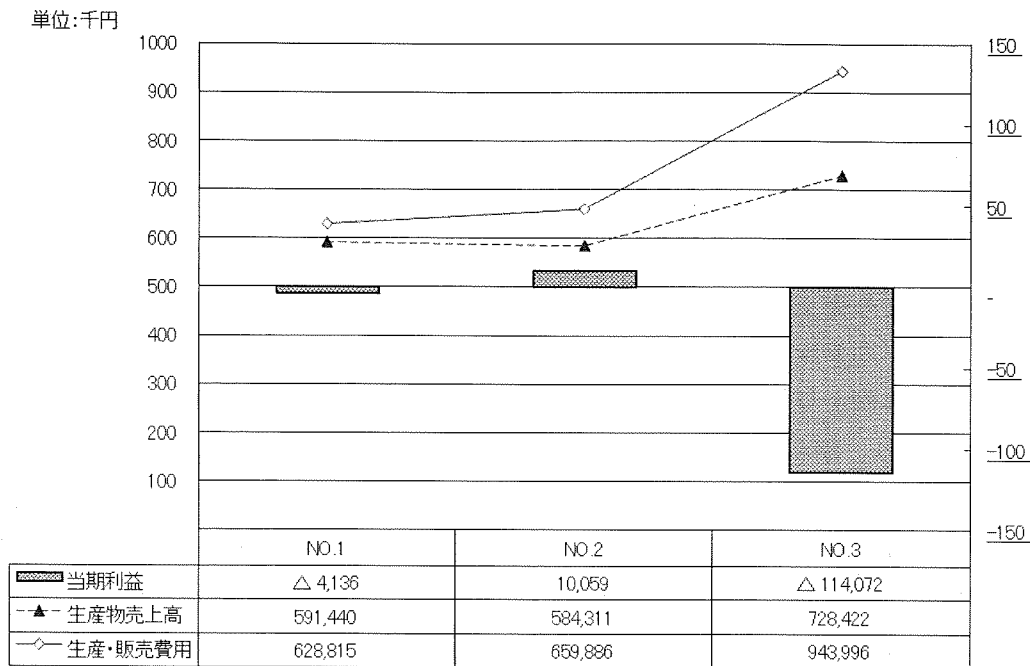


図-4. 種豚1頭当り売上高と経常利益

◆ 種雌豚当り所得

3事例の種雌豚1頭当り所得平均は47,271円(28,816円～60,835円)となり、指標値の10万円以上の所得があった事例はなかった。所得は当期利益に役員報酬又は家族労賃を加えたもので、役員報酬(家族労賃)の高低が大きく関係している。

3. 指導の方向と対策

H21は前年の飼料原料の価格高騰による飼料費比率の上昇から、若干落ち着きを取り戻し、配合飼料価格はやや高止まりではあるものの、生産原価は前年度よりやや減少した。しかし、8月～10月の相場の低迷もあり、今期はマイナスの経営が多く、今後も飼料費の高止まりが予想されるため、より一層のコスト見直しをすると共に、生産性向上による効率の良い経営を行うことが重要である。

(1) 繁殖性向上対策

◆ 受胎率の向上

受胎率向上には授乳母豚の個体栄養管理を徹底して行い、適度なボディコンディションで離乳し、5日以内での発情再帰を促し、初発情交配で85%以上の受胎率を目指したい。

受胎の成否は自然交配、人工授精を問わず交配適期の把握が最も重要であり、そのためには発情状況の観察を注意して行い、2～3回の複数回交配が望ましい。交配に当たっては正常精液の利用が前提であり、定期的な精液検査は欠かせない。

再発情豚の交配に当たっては、発情徴候、交配時期に留意し、さらに不受胎となった場合の供用継続か更新かについては早期に判断する。妊娠鑑定は早期に確実にを行い、空胎豚の無駄な飼養を無くし、妊娠豚に関しては個体管理を徹底して事故防止に努める。また、受胎率低下は夏場交配（暑熱環境）によることが多く、雄豚へのドリップクーリングや気温の上昇しない早朝に交配を行うなどの夏場対策が必要である。

◆ 分娩率の向上

折角の妊娠も分娩まで至らなければ大きな損失になる。妊娠豚の栄養・飼養管理を十分に注意し、母豚移動などに伴う物理的事故原因の排除、日本脳炎やパルボの予防処置等、流・早・死産をさせないように心掛け妊娠豚を無事分娩させたい。

◆ 育成率の向上

種雌豚 1 頭当りの生産性を上げるには、育成率の向上と安定が欠かせない。育成率向上の要点は、哺乳子豚の飼養・衛生管理で、本事例中の哺乳子豚事故内容として虚弱と圧死によるものが多く、虚弱に関しては妊娠豚の適切な栄養管理を行い、なるべく虚弱子豚を出さないよう心掛ける。また、圧死に関しては分娩房の構造や子豚の居住環境、母豚の性質・泌乳能力など幾つかの要因が考えられるので、原因の究明と対策が必要である。県内の優良事例では分割授乳や授乳母豚の飼料給与中は哺乳子豚を隔離することで圧死等の事故低減を図り、育成率の向上に成功している事例もあることから、分娩看護及び哺乳管理に問題のある事例はこうした、管理も取り入れながら、改善に取り組んで欲しい。また、十分な労働力の確保が難しい時に疎かになりがちの部分でもあり、今後の改善には均一的な労働力確保か計画的な交配分娩管理も必要。

(2) 肥育成績向上対策

◆ 種雌豚当り出荷頭数の増頭と事故率の低下

対象経営における肥育成績の改善ポイントは種雌豚 1 頭当り出荷頭数、即ち枝肉出荷量の向上にある。

県畜産経営指標の肥育技術では肉豚出荷生体重 115kg 前後で枝肉重量 75kg 前後となっており、これら指標値をクリアーするためには、多様化する疾病に対する予防対策の徹底と密飼い等の飼養管理を改善することにより、生産した豚の損耗を防止し事故率の低下に努め、1 母豚当り年間出荷頭数 21.4 頭以上、出荷枝肉量 1,600kg 以上を目指して欲しい。

離乳後事故率に関しては、表-4 にあるように平成 15 年以降上昇の傾向にあったが、今期はやや下がってきた。事故の内容は主に PRRS と呼吸器系による被害

が多く、離乳後 30kg までの事故が目立っている。オールイン・オールアウト後の徹底した洗浄・消毒・乾燥の実施、外部導入豚の馴致や作業域の区別や人の流れ、ピッグフローの見直し等、各農場での問題点の把握と各機関との連携による改善が必要である。

◆ 出荷豚（肉質）評価の向上

肉豚評価を左右する主な要因は概ね 3 つに大別される。

- ① 素豚（遺伝的要因）
- ② 飼養技術（飼料の質・栄養水準と給与方法、豚群の編成等）
- ③ 出荷技術（出荷日令・体重・出荷先選定）

最も基本的な要因は①の遺伝的資質であるが、これは母豚群の品種・系統構成によるもので長期にわたるデータに基づく選抜が基本で短期的な改良は難しい。

飼料の質と給与方法については、素豚の資質にあった栄養レベルの飼料により適度な発育の早さ（出荷日令と体重）で高い上物率が得られるよう飼料の選択と給与をする。

同時離乳腹数の多い大型経営ではできるだけ同質、近似日令の豚群編成に心掛け、雄雌別群として豚群の資質と発育ステージにあった段階的飼料栄養水準飼料の給与（フェイズフィーディング）を行う。

肉豚出荷に対しての個体チェックは不可欠であり、個体計量はその基本である。個体標識により、個体経歴から枝肉評価まで一連のデータとしてその結果が次の交配や選抜・淘汰にフィードバックできるシステム化が望ましい。

(3) 畜産環境対策

家畜排泄物は、これまで畜産業における資源として農産物や飼料作物の生産に有効に利用されてきた。しかしながら、近年、畜産経営の大規模化の進行、高齢化に伴う農作業省力化等を背景として家畜排泄物の資源としての利用が困難になりつつある一方、地域の生活環境に関する問題も生じている。

畜産経営に起因する環境問題発生率は、家畜飼養規模の拡大や混住化の進展等に伴い増加している。そうした中で、苦情の内容は全家畜を通じて悪臭関連が最も多く、ついで害虫発生や水質汚濁である。家畜排泄物について、その適正な管理を確保し、堆肥として活用するなどの資源としての有効利用を一層促進していく必要がある。

◆ 臭気対策

畜舎内の臭気は舎内にある糞尿の量に左右され、畜舎内の基本的な臭気対策は糞尿の早期搬出の励行である。また、周辺の住宅事情等によっては周囲から苦情の出

る前に消臭剤・脱臭剤の利用など、先手を打った行動が極めて重要である。

◆ 堆肥の流通促進

有機農産物需要の増大を背景に家畜糞の需要が高まっており、地域を越えた広域流通化の機運にある。

これに応じて、供給できる堆肥の質量・販売条件などを堆肥流通情報として畜産会ホームページ上で広報しているの、良質堆肥の生産と流通の情報化への積極的協力を願いたい。また最近、耕畜連携という言葉が誌面上でも良く見かけるようになった。今後、畜産サイドも堆肥づくりだけでなく、いかに利用者側の意見や希望を吸収し製品を提供できるかが課題になる。まずは生産した堆肥の成分程度は知っておく必要があるだろう。

(4) 食肉の販売取り組み

◆ 安全性・信頼性をアピールできる県産豚肉の生産・販売

近年、国内外の家畜や家禽の疾病の発生に伴い、消費者は食肉の安全性・信頼性にとっても高い関心を持つようになった。これからは消費者に対する食肉の安全性・信頼性の提示は必要不可欠なものとなる。そのためには生産段階での適切な飼養管理、一般衛生管理をきちんと行い、より健康で安全な食肉を消費者に提供しなければならない。また、トレーサビリティシステムの構築や JAS 認定制度の活用など消費者の目に見える安心安全を目指す。

これからの養豚経営は、豚肉生産だけでなく経営の生き残りをかけて、どのような付加価値を付けて何処に売り込むのかのマーケティング戦略が必要になる。現在の県内豚肉自給率はわずか6～7%に過ぎない。県内養豚生産者は過去10年で半数近くまで減少し、出荷頭数は年々減少傾向にある中で、県産豚肉自体が付加価値といえるようになってきた。銘柄化だけが付加価値を付ける方法ではなく、消費者のニーズに応えられるような安全で美味しい豚肉を生産し、地産地消や生産者の顔が見える販売方式を前面に出すなどして、消費者に信頼され、評価される生産・販売を心掛ける必要がある。

4. 経営診断分析図表

表一 平成21年度 養豚経営技術分析数値(経営規模・繁殖・生産技術)

区分	項目	(H20) NO.1	(H21) NO.1	(H20) NO.2	(H21) NO.2	(H20) NO.3	(H21) NO.3	平均値	最大値	最小値	指標	前年平均値
経営	経営形態	一貫経営	一貫経営	一貫経営	一貫経営	一貫経営	一貫経営				一貫経営	一貫経営
	労働力1人当り飼養母猪数	53.0	56.0	60.0	60.5	57.4	50.4	55.6	60.5	50.4		56.8
規模	労働力1人当り飼養雄豚数	1.5	1.6	3.8	3.7	2.6	3.0	2.8	3.7	1.6		2.6
	1 腹当 総産子数	10.6	10.8	13.2	12.9	11.0	11.3	11.6	12.9	10.8		11.6
繁殖	1 腹当生存子豚頭数(頭)	10.4	10.3	11.9	12.1	10.3	10.4	10.9	12.1	10.3	10.6頭以上	10.9
	1 腹当離乳子豚頭数(頭)	9.0	9.1	9.4	9.4	9.1	9.3	9.3	9.4	9.1	9.8頭以上	9.2
技術	母猪1頭当生存子豚数(頭)	24.1	24.1	25.7	28.0	24.3	25.6	25.9	28.0	24.1	24.4頭以上	24.7
	母猪1頭当離乳子豚数(頭)	20.2	20.7	21.0	21.4	20.3	22.5	21.5	22.5	20.7	22.5頭以上	20.5
技術	1 腹当哺乳子豚事故(頭)	1.5	1.4	2.4	2.2	1.3	1.3	1.6	2.2	1.3	0.8頭以下	1.7
	育成率(%)	86.7	88.3	79.0	77.7	88.3	89.1	85.0	89.1	77.7	92%前後	84.7
技術	年間離乳日令(日)	25.5	26.0	25.6	25.8	27.0	27.0	26.3	27.0	25.8	25日前後	25.6
	母猪更新率(%)	30.9	42.4	48.6	25.8	30.2	13.2	27.1	42.4	13.2	40%前後	36.6
技術	分娩回轉(回)	2.32	2.34	2.16	2.31	2.36	2.45	2.37	2.45	2.31	2.3回以上	2.28
	1 母猪当年間出荷頭数(頭)	18.1	17.4	20.5	19.0	19.7	20.9	19.1	20.9	17.4	21.4頭以上	19.4
技術	肉豚出荷1頭生体量(kg)	113.7	115.6	110.9	113.0	115.9	116.3	115.0	116.3	113.0	115kg前後	113.5
	1 頭当り枝肉量(kg)	74.4	75.7	73.3	74.7	75.3	75.6	75.3	75.7	74.7	75kg前後	74.3
技術	母猪1頭当出荷枝肉量(kg)	1,325.4	1,283.8	1,480.2	1,383.5	1,486.6	1,569.7	1,412.3	1,569.7	1,283.8	1600kg以上	1,431
	農場(経営)飼料要求率	3.49	3.37	3.50	3.57	3.44	3.43	3.46	3.57	3.37	3.4%以下	3.48
技術	枝肉経営飼料要求率	5.42	5.27	5.09	5.40	5.30	5.31	5.33	5.40	5.27		5.27
	事故率(離乳一出荷)(%)	14.6	7.9	6.3	6.8	8.0	7.0	7.2	7.9	6.8	3%以下	9.7

* 1 母猪当年間出荷頭数 = (肉豚出荷 + 候補豚繰出し + 子豚出荷) / 年間平均母猪数

表一2 平成21年度 種雌豚1頭当り損益分析表

項目	農場番号	(H20) NO.1	(H21) NO.1	(H20) NO.2	(H21) NO.2	(H20) NO.3	(H21) NO.3	平均	最大値	最小値	前年平均値
期首棚卸高		80,435	97,144	96,952	89,717	198,122	230,192	139,018	230,192	89,717	125,170
(購入飼料費)		307,540	253,866	383,699	336,561	517,949	445,682	345,370	445,682	253,866	403,063
(素豚費)		3,274				19,229	10,853	10,853	10,853	10,853	11,252
(衛生費)		51,833	47,189	54,804	50,982	37,525	45,116	47,762	50,982	45,116	48,054
(運搬費)		8,183	2,696	11,194	14,038			8,367	14,038	2,696	6,459
(諸材料費)		7,162	9,245	11,505	3,599	37,525	8,596	7,147	9,245	3,599	18,731
(修繕費)		23,486	10,885	21,458	5,881	5,748	6,447	7,738	10,885	5,881	16,897
(水道光熱費)		30,578	29,962	36,224	29,107	34,383	37,100	32,056	37,100	29,107	33,728
(減価償却費)		36,767	26,661		24,335	49,289	56,846	35,947	56,846	24,335	28,685
(人件費)		117,896	110,711	94,831	96,022	141,425	144,807	117,180	144,807	96,022	118,051
(飼養雑費)		1,980		2,987	2,618	3,874	315	1,467	2,618	315	2,947
生産費用		588,699	493,431	616,702	563,142	811,288	755,761	604,111	755,761	493,431	672,230
期末棚卸高		△ 102,517	△ 124,516	△ 90,384	△ 109,528	△ 202,154	△ 195,861	△ 143,302	△ 109,528	△ 195,861	△ 131,685
期中種豚振替額		7,353	10,704	8,689	15,750	1,917	4,814	10,423	15,750	4,814	5,986
当期生産原価		559,265	455,354	614,582	527,580	805,339	785,278	589,404	785,278	455,354	659,729
販売管理費計		168,031	173,461	168,777	132,306	153,622	158,718	154,828	173,461	132,306	163,477
事業外費用		21,875	13,755	18,350	28,205	5,019	6,461	16,140	28,205	6,461	15,081
費用合計		749,171	642,570	801,709	688,091	963,980	950,457	760,373	950,457	642,570	838,287
生産物売上高		717,765	591,440	717,482	584,311	841,793	728,422	634,724	728,422	584,311	759,013
(肉豚売上高)		692,917	563,119	689,411	567,002	832,335	720,661	616,927	720,661	563,119	738,221
事業外収益		34,238	46,993	54,358	113,838	135,920	107,962	89,598	113,838	46,993	74,839
総収益		752,918	638,433	771,840	698,150	977,713	836,384	724,322	836,384	638,433	834,157
当期利益金		3,747	△ 4,136	△ 29,869	10,059	13,733	△ 114,072	△ 36,050	10,059	△ 114,072	△ 4,130
所得額		63,161	52,163	21,285	60,836	153,160	28,816	47,272	60,836	28,816	79,202

表-3 平成21年度農場別經濟性分析表

項目	農場 No.		(H20) NO.1	(H21) NO.1	(H20) NO.2	(H21) NO.2	(H20) NO.3	(H21) NO.3	平均	最大値	最小値	指標	前年平均値
	單位	農 場 No.											
1、売上高飼料費率	(%)		42.8	42.9	53.5	57.6	61.5	0.6	33.7	57.6	0.6	50%以下	52.6
2、売上高人件費率	(%)		16.4	18.7	13.2	16.4	16.8	0.2	11.8	18.7	0.2	17%前後	15.5
3、売上高衛生費率	(%)		7.2	7.9	7.6	8.7	4.5	0.1	5.6	8.7	0.1	8%以下	6.4
4、売上高支払利息率	(%)		1.7	2	1.3	1.5	0	0.0	1.2	2	0.0	3%以下	1.0
5、売上高純利益率	(%)		0.5	-0.6	-4.2	1.7	1.6	-0.2	0.3	1.7	-0.6	6%以上	-0.7
6、売上高所得率	(%)		8.8	0.1	3.0	0.1	18.2	0.0	0.1	0.1	0.0	15%以上	10.0
7、飼料1kg平均価格	(円)		43	37	52	46	66	53	45.5	53.5	37.5		53.6
8、生体kg当り販売額	(円)		342	287	308	271	365	298	285.5	298.4	271.1		338.3
9、生体kg当生産原価	(円)		276	232	276	269	353	325	275.5	325.2	232.2		301.7
10、枝肉kg当り販売額	(円)		523	438	467	411	562	459	436.1	459.1	410.7		517.3
11、枝肉kg当生産原価	(円)		422	354	417	382	544	500	412.3	500.3	354.4		461.0
12、出荷豚1頭販売額	(円)		38,914	33,176	34,273	30,683	42,313	34,694	32,851.1	34,694.2	30,683.0		38,500
13、出荷豚1頭生産原価	(円)		31,408	26,827	30,553	28,550	40,941	37,805	31,060.7	37,805.1	26,827.2		34,301
14、1母豚当り売上高	(円)		717,765	591,440	717,482	584,311	841,793	728,422	634,724.6	728,422.0	584,311.5	63万円以上	759,013
15、1母豚当生産原価	(円)		559,265	455,354	614,582	527,580	805,339	785,278	589,404.3	785,278.2	455,354.2	57万円以下	659,729
16、1母豚当り純利益	(円)		3,747	△ 4,136	△ 29,869	10,059	13,733	△ 114,072	△ 360,500	100,588	△ 114,072.4		△ 4,130
17、1母豚当り所得	(円)		63,161	52,163	21,285	60,836	153,160	28,816	47,271.7	60,835.6	28,816.3	10万円以上	79,202

表一4 神奈川県10力年間 養豚経営飼養技術分析結果

年 度	12('00)	13('01)	14('02)	15('03)	16('04)	17('05)	18('06)	19('07)	20('08)	21('09)
診断集計戸数(戸)	8	7	6	6	6	6	6	3	3	3
経営規模										
労働力人員(人)	3.9	3.2	5.2	3.5	3.8	4.0	3.7	4.8	4.0	4.0
母猪常時飼養頭数(頭)	244.3	267.3	292.5	182	225.9	229.2	221.5	303.4	220.2	224.9
雄豚常時飼養頭数(頭)	14.9	17.3	18.2	9.6	9.6	9.8	9.9	11.4	8.4	8.8
繁殖成績										
1腹当生存子豚頭数(頭)	10.3	10.4	10.4	10.4	10.4	10.2	10.6	11.1	10.9	10.9
1腹当離乳子豚頭数(頭)	9.3	9.3	9.4	9.3	9.3	9.2	9.4	9.4	9.2	9.3
1母猪当年間離乳頭数(頭)	20.8	21	20.2	20.3	21.2	20.6	20.6	21.6	20.3	21.5
育成率(%)	90.5	89.5	90.7	89.5	88.6	90.4	88.7	85.2	84.7	85.0
分娩回転数(回)	2.27	2.28	2.18	2.21	2.33	2.29	2.21	2.3	2.28	2.37
離乳日令(日)	23.9	24.3	25.5	25.5	24.3	24.4	25.8	25.4	25.6	26.3
母猪更新率(%)	40.4	43	36.8	35.2	44.8	40.6	39.8	40.3	36.6	27.1
肥育成績										
1母猪当り肉豚出荷頭数(頭)	19.4	19.7	19.2	19.6	19.6	19	18.6	19.6	19.4	19.1
肉豚出荷体重(kg)	110.9	111.5	112.0	113.2	113.6	114.1	112.8	112.3	113.5	115.0
1頭当り枝肉量(kg)	73.1	73.3	73.5	74.2	74.3	74.9	74.0	75.0	74.3	75.3
1母猪当り枝肉出荷量(kg)	1,390	1,420.5	1,392.8	1,382.6	1,424.7	1,377.0	1,347.0	1,411.7	1,430.7	1,412.3
事故率(離乳一出荷)(%)	5.6	6.5	5.2	4.9	7.2	9	7.8	12.9	9.7	7.2
農場飼料要求率	3.4	3.45	3.45	3.55	3.54	3.46	3.46	3.60	3.48	3.46
枝肉飼料要求率	5.4	5.32	5.31	5.45	5.45	5.38	5.36	5.61	5.27	5.33
(参考)										
県内豚飼養戸数(戸)	130	120	110	100	99	95	88	82	69	71
県内豚飼養頭数(頭)	100,300	98,400	95,500	98,500	98,900	92,400	86,500	78,400	76,800	79,700
県内1戸当り平均飼養頭数(頭)	772	820	868	985	998	973	983	956	1,113	1,122

神奈川県10力年間養豚経営経済性分析結果の平均

年 度	12('00)	13('01)	14('02)	15('03)	16('04)	17('05)	18('06)	19('07)	20('08)	21('09)
診断集計戸数(戸)	8	7	6	6	6	6	6	3	3	3
1母豚当り売上高	597,629	658,065	661,272	609,286	681,711	655,894	633,030	669,429	759,013	634,725
枝肉kg当り単価	421	455	461	420	466	465	464	472	517	436
1母豚当り飼料費	250,258	252,540	267,059	284,263	312,109	287,851	283,089	363,449	403,063	345,370
飼料単価	33.8	33.6	36.3	38.4	40.4	38.9	40.0	48.1	53.6	45.5
1母豚当り生産原価	473,524	483,163	499,365	515,759	540,350	523,324	494,520	578,444	659,728	589,404
1母豚当り所得額	99,726	118,881	134,926	65,574	104,282	74,166	67,692	51,694	79,202	47,272
売上高飼料費率	41.9	39.3	40.3	47.5	45.7	43.6	44.9	53.7	52.6	53.9
売上高人件費率	17	16.5	17.3	16.8	14.6	15.8	15.4	14.3	15.5	18.3
売上高衛生費率	5.8	4.9	4.4	5.1	5.7	6.4	5.4	6.2	6.4	7.6
売上高支払利息率	1.6	1.5	1.3	1.4	0.9	0.7	1.0	1.1	1.0	1.2
売上高純利益率	5.8	8.5	9.4	-1.1	6.1	1.2	1.7	1.2	-0.7	-4.9
売上高所得率	15.9	17.6	19.3	10.0	14.9	10.7	11.0	7.7	10.0	7.7